年　　組　　氏名

大分合同新聞 2025年7月25日(金) 朝刊 2面

論説

2025.7.25

夏祭りシーズン到来

「包摂力」で伝統継承を

祭りばやしが弾む。浴衣姿の地域住民が踊りの輪を広げる。夜店が並び、やがて夜空に花火が打ち上がる――。

大分県に夏祭りシーズンが到来した。きょう25日は中津祇園の「引き出し」があり、日田祇園はあす26日から山鉾（やまぼこ）の巡行が始まる。伝統を継承しながら地域の誇りを再認識する一方、多様な価値観にも門戸を広げる「共生の場」にしたい。

これから県内は夏祭りでにぎわう。写真は姫島の盆踊（昨年8月）

夏祭りは主に五穀豊穣（ほうじょう）、無病息災などの祈願や祖先の霊を慰める意味合いを持つ。地域に根差した文化、信教、コミュニティーを肌で感じ取ることができる貴重な機会だ。

しかしながら過疎・高齢化に伴う担い手不足により、祭りは大小を問わず全国各地で消失している。大分県も例外ではなく、存続にあえぐ地域は多い。

県の北部や中部（一部地区）に伝わる初盆供養の盆踊り「庭入り」は、住民が対象家庭を一軒一軒回る伝統行事だ。ところが高齢化や若手の流出で運営ができなくなり、やむなく取りやめる集落は後を絶たない。

誰が祭りを守っていくか。祭りは「地域」に置き換えてもいい。それは人口減少が進む18市町村の共通の悩みでもある。そんな中、在留外国人を祭りの運営メンバーの一員として迎え入れる地域が県内で増えていることは誉れ高い。

留学生が街を行き交う別府市は浴衣で祭りを楽しむ外国人の姿が当たり前となり、各種行事に準備段階から携わる若者も珍しくない。豊後高田市は8月18日の高田観光盆踊り大会で、今年も外国人らが市民と一緒に郷土芸能「草地おどり」を舞う。

私たちと触れ合う彼・彼女たちは「県民」であり、その存在は共生社会の象徴でもあろう。何より、地域に欠かせない祭りの担い手にもなっている。

近年、世界各地ではポピュリズム的な政治言説が台頭し、日本でも排外的な考え方が注目される。さまざまな思想があるとはいえ、偏狭的な国民中心主義が社会を分断させることは他国の姿に詳しい。

言うまでもなく、外国人の存在は人口減少社会の日本に不可欠だ。県国際政策課によると、県内の在留外国人は昨年末時点で1万9860人いる。半数以上は別府、大分両市に暮らし、中津、宇佐、豊後高田市などの県北部で自動車関連工場に従事する技能実習生も多い。いずれも地域に溶け込んでいる。

べっぷ火の海まつり（26、27日）、大分七夕まつり（8月1、2日）、姫島の盆踊（同14、15日）、本場鶴崎踊大会（同23日）、津久見扇子踊り大会（同30日）、国宝臼杵石仏火まつり（同）…。県内の夏祭りはこれからがピークだ。

伝統の継承には包摂力が欠かせない。住民や帰省客らが古里を誇る場であると同時に、大分に暮らす移住者や外国人たちが地域に入るきっかけになれば、と願う。

心も「豊の国」でありたい。

©大分合同新聞社　教育目的以外の無断転載・複製および頒布は禁止します。

大分合同新聞
ワークシート

年　　組　　氏名

〔問①〕記事では夏祭りは主にどのような意味合いを持つとしていますか。

〔問②〕県北部や中部に伝わる「庭入り」を、やむなく取りやめる集落が後を絶たない理由は何ですか。

〔問③〕県内の在留外国人は昨年末時点で何人でしょうか。

〔問④〕県内で暮らす県外からの移住者や外国人が地域に溶け込むにはどのようなことが必要でしょうか。あなたの考えを書いてみましょう。また、周りの人とも意見交換してみましょう。

©大分合同新聞社　教育目的以外の無断転載・複製および頒布は禁止します。